

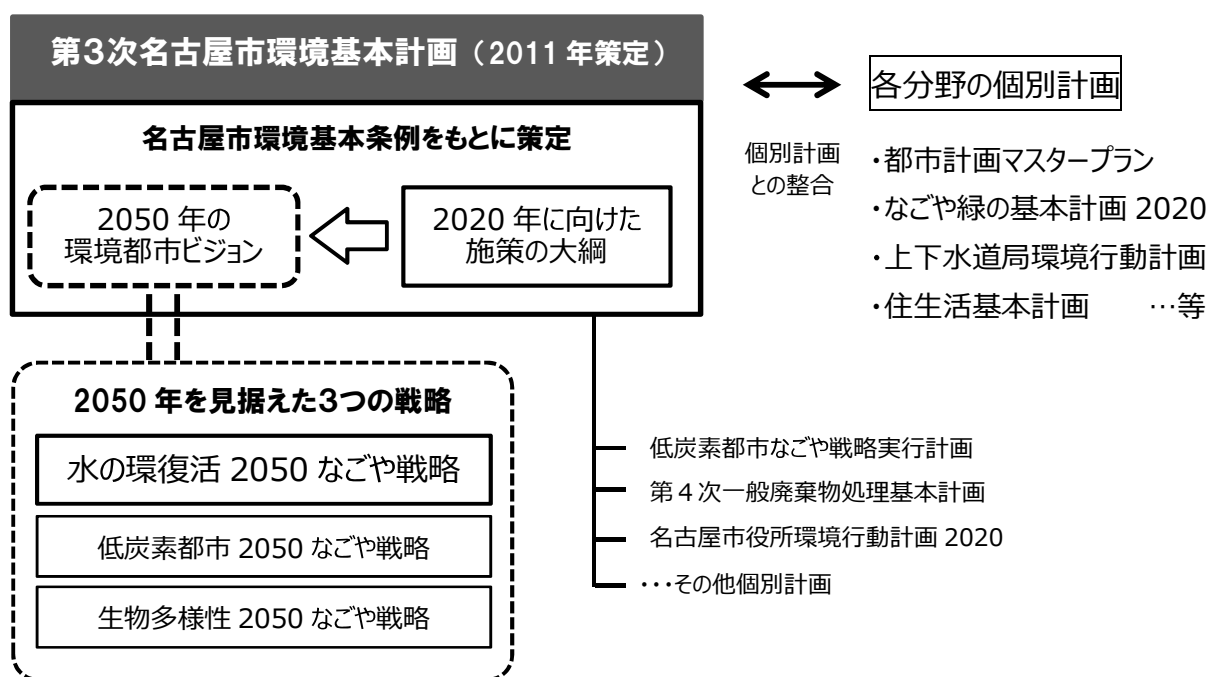
第2章 第1期実行計画の成果

本章では、第1期実行計画を終えて得られた成果をとりまとめ、
第2期に向けて解決すべき課題を整理していきます。

第1節 名古屋市の計画等への位置づけ

本市が環境行政を推進する上で中心的な役割を担う環境面における総合的な計画である『第3次名古屋市環境基本計画』において、2050年を見据えた戦略のひとつとして、水の環復活 2050 なごや戦略を位置づけています。

また、水、緑、まちづくりなど各分野の個別計画においても、健全な水循環の回復に関する考え方を盛り込んでいます。



第2節 主な取り組み内容

第1期実行計画において、行政の施策や市民の協力を得ながら進めてきた取り組みのうち、代表的な事例を場所ごとに示します。

1. 市内全域で進めていく取り組み

場所や地域を特定せず、市内で広く取り組んできたことを『市内全域で進めていく取り組み』として整理します。

小学校で水循環に関する授業を実施しました。

『上下水道訪問授業』

生活に欠かせない水道のしくみ、下水道の役割など水環境における水道・下水道のはたらきや自然環境と水循環のかかわりについて学んでもらうため、小学4年生の社会科の時間に職員が講師役となって小学校へ出向き、実験をまじえた授業を行いました。



名古屋打ち水大作戦を行いました。

広小路夏まつり等のイベントにおいて、下水再生水※を活用して、市街地で大人数での打ち水を実施しました。

打ち水を行う際は、風呂の残り湯などを有効に活用することが望ましく、家庭でも簡単に取組むことができます。



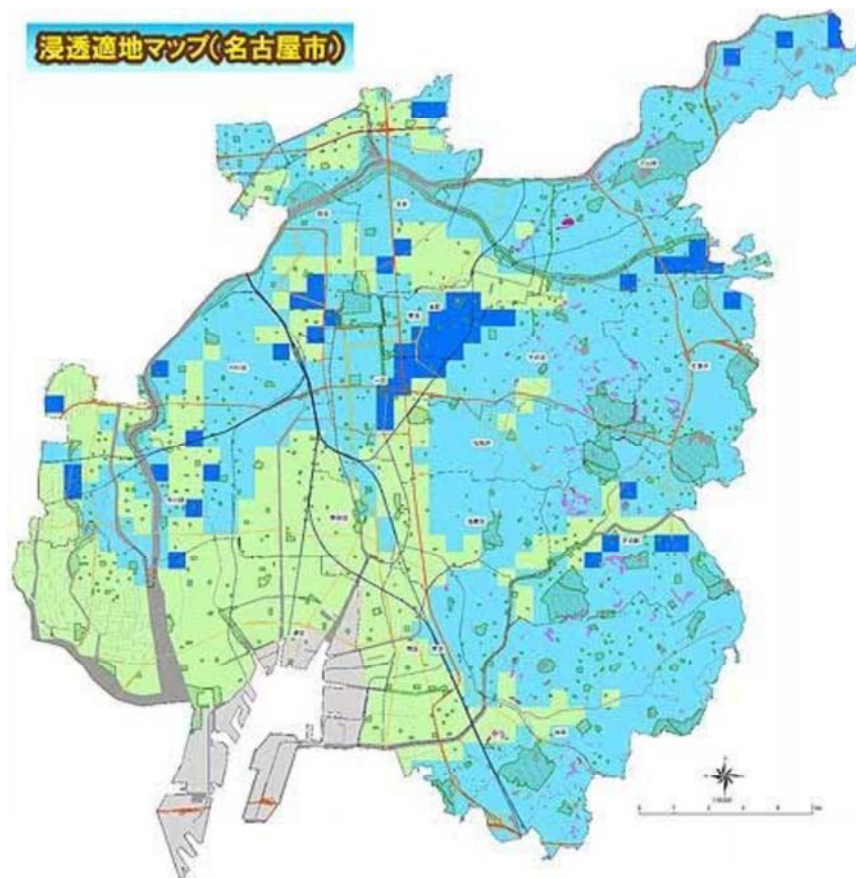
地下水位の観測を行いました。

観測用の井戸を設置して地下水位を測定しています。地下水位を測定することで、地盤沈下や地下水涵養の大まかな状況を把握することができます。

第1期では、地下水位の観測を継続していくとともに、新たな観測井戸を設置しました。

※下水再生水：通常の下水处理に加え、さらに高度な処理（ろ過・滅菌）した水のことで、道路散水やせせらぎなどにも利用されている。ただし、飲むことはできない。

「浸透適地マップ」を作成しました。



健全な水循環を復活するためには、丘陵地など雨水浸透に適した地域における雨水浸透ますの設置や透水性舗装の整備が効果的です。

名古屋市内のどのあたりが雨水浸透に適しているかの目安を示すために、「浸透適地マップ」を作りました。

マップを活用することによって、市域全体で雨水流出抑制が進み、浸水対策に役立つとともに、地下水が涵養され、健全な水循環の復活につなげることができます。

「浸透適地マップ」は名古屋市公式ウェブサイト上でご覧になれます。

<http://www.city.nagoya.jp/kankyo/page/0000016733.html>

2. 建築物とその周囲や駐車場に関する取り組み

市内の土地はおよそ半分が建物用地として活用されており、庭や駐車場、建物の壁面や屋上などを利用して、水の環境復活に役立つ取り組みを進めていくことが重要です。

建物の敷地内において、透水性舗装を整備しました。

透水性舗装とは、雨水を地中に浸透させることを目的とした舗装です。豪雨時に下水や河川がまちにあふれないようにしたり、地下水を涵養したりする効果があります。

公共施設の駐車場、公営住宅の敷地内を中心として、透水性舗装の整備を進めました。



緑化地域制度により、建築敷地での一定規模の緑化を義務付けました。

一定規模以上の敷地において建築物の新築や増築を行う場合に、定められた面積以上の緑化を義務付ける「緑化地域制度」の運用を、平成 20 年に開始しました。



小中学校において、建物緑化や雨水貯留槽を整備しました。

学校の新設や改築を実施する際に、雨水貯留槽の整備や建物緑化などの環境に配慮した整備を進めました。

その他の公共施設においても、雨水の浸透施設や貯留施設の設置等を進めました。



家庭での雨水浸透ますや雨水タンクの設置について啓発しました。

家庭でできる浸透・貯留を増やす取り組みとして、雨水タンクや雨水浸透ますを設置について、イベント等の機会を活用してPRを行いました。

豪雨時に自宅周辺の浸水の軽減が期待できるとともに、地下水の涵養により緑を保全することにつながります。

屋根に降った雨をタンクに貯めることで、雨水を有効に利用することもできます。



3. 道路に関する取り組み

透水性舗装、雨水浸透ますの整備を進めました。 側溝や浸透ますの清掃を啓発しました。

市内の道路のほとんどはアスファルトやコンクリートにより舗装されています。雨水浸透に適した地域においては、歩道や自転車道で透水性舗装や雨水浸透ますの整備を進めました。

また、雨水ますにゴミや落ち葉が詰まると浸水の原因になることから、雨水ますや側溝の清掃について、イベント等の機会を活用してPRを行いました。



4. 公園に関する取り組み

公園整備において、雨水浸透ますの設置、透水性舗装の整備、植栽などに努めました。

市内にはおよそ 1,600 ha の都市公園があり、水循環の回復をめざすうえで重要な場所となっています。

米野公園などの公園の整備においては、雨水浸透ますの設置や透水性舗装の整備、植栽を行いました。

都市の中でも水辺や緑に囲まれて身体を動かしたり、安らいだりできる環境の創出を進めました。



5. 林や森に関する取り組み

森づくり事業を通じて市民の協力を得ながら、緑地の保全や緑化を進めました。

東部丘陵地域を中心に、市内には面積の広い緑地が残っていますが、周辺部の開発が進んでいくことによる緑の減少が懸念されます。

そのため、特別緑地保全地区等の法令に基づく制度を運用し、市民や事業者等の積極的な協力により、民有樹林地の保全に取り組んできました。

市民・事業者・行政のパートナーシップにより、東山公園及び平和公園一帯で、里山環境の保全や自然とふれあう活動等を行う「東山の森づくり」事業を進めました。また、市西部の戸田川緑地では、苗木の植樹活動などを行う「西の森づくり」を進めました。



6. 河川・運河・海に関する取り組み

河川的环境保全や生き物がすむ環境の創出に向けた取り組みを進めました。

護岸構造を緩い傾斜から急傾斜に改修し、河床幅をより広く確保することによって、川らしさを作る土砂の移動が生じる場ができ、自然に任せて瀬や淵が形成され多種多様な自然環境を創出することができました。

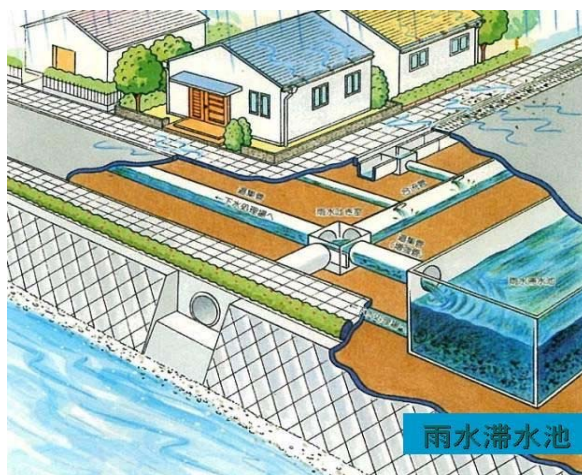


香流川

合流式下水道の改善や、下水の高度処理施設の導入を進めました。

合流式下水道※が整備されている地域では、雨天時に雨量が増加し一定量を超えると、路面など街の汚れや汚水の一部を含んだ雨水が、雨水ポンプ所などから直接河川へ放流されます。

この対策として汚れの度合いが大きい降雨初期の雨水を一時的に貯留し、降雨終了後に水処理センターで処理するため、雨水滞水池の建設を進めました。併せて、雨天時に実施する簡易処理の処理水質を向上できる簡易処理高度化施設の設置を進めました。



また、閉鎖性水域である伊勢湾の富栄養化を防止するため、水質汚濁、赤潮の発生等の原因になる窒素・りんの過剰な排出を防ぐように、下水の高度処理施設（従来の処理方式に比べ、窒素・りんを多く除去できる処理方法）の導入を進めました。

※合流式下水道：下水道には、生活排水などの汚水を流すだけではなく、雨水を流す役割もある。下水道の流し方には、汚水と雨水を同じ管で流す『合流式』と、汚水と雨水を別々の管で流す『分流式』に分けられる。

河川への地下水や下水再生水の導入を進めました。

下水道整備が進むにつれて、市内河川の水質は改善されつつあります。

水源の乏しい河川や水路等は水質が悪化しやすいため、地下水や下水再生水を導水することによって、水辺の多様な生態系の保全と回復を図るよう努めました。



瀬古橋上流での浅層地下水の活用

堀川や中川運河の整備を進めました。

中川運河では、護岸の改修や、中川口ポンプ所の改修や公園整備などを進めてきました。

平成 24 年 10 月に『中川運河再生計画』を策定し、うるおいや憩い、にぎわいをもたらす運河の再生を推進することとしました。

市域の中心部を南北に流下する堀川は、都市の中の貴重な水辺空間となっており、憩いの場、にぎわいの場、水辺とふれあえる場として、都市景観など周辺環境と水辺環境との調和に努めた護岸改修を実施しました。



中川運河 中川橋



堀川 清水わくわく水

水質環境目標値市民モニターによる河川等の水質調査を行いました。

公募による市民モニターグループが、「水質環境目標値※」のうち「親しみやすい指標※」について、市内の河川・ため池全 41 地点で、年 4 回（春・夏・秋・冬）の水質調査を行いました。



※水質環境目標値：環境基本条例で、「市民の健康を保護し、快適な生活環境を確保する上で維持されるべき目標値」と定義している。

※親しみやすい指標：水質環境目標値のひとつであり、透視度や水のにおい、水の色といった感覚的にわかりやすい指標。

7. 湿地・湧水地とため池に関する取り組み

湧き水モニターによる湧水量や水質の調査を行いました。

市内には東部丘陵地域を中心として多くのため池が存在し、湧き水が観測できる地点も多くあります。東部丘陵地域は雨水の浸透に適しており、雨水を積極的に浸透させることが湧き水の保全につながります。

湧き水は水循環の重要な要素ですが、直接目にしたり触れたりする機会が少なく、観測も容易ではないため、まだわかっていないことも多くあります。

公募による市民モニターグループが、市内の湧き水地点全10地点で、年4回（春・夏・秋・冬）の調査を行いました。



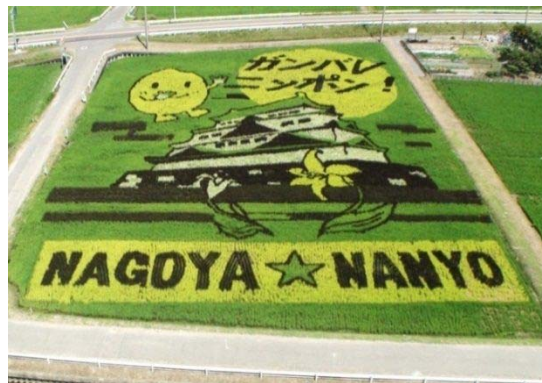
8. 農地、農業用水路に関する取り組み

市民農園事業を通じて、農地の保全や農に親しむ機会を創出しました。

農地は水循環の機能を確保するのに有効な場所です。市内の西部地域では農地が多くありますが、市街化により農地の面積は減少しています。

農地の保全と併せて、市民農園事業や農業見学会などのイベントを通じて、市民が農に親しむ環境を創出しました。

葉の色の異なる古代米等を使って広大な水田に絵を描く「田んぼアート」の制作を通して、楽しく稲作体験をしてもらうことを目的として、茶屋新田田んぼアート事業を実施しました。



9. 広域連携に関する取り組み

本市は、市域外の多くの地域と「水」でつながっているため、水の環復活に向けて良い関係を築いていく必要があります。

木曽三川流域のみなさまとの交流・連携を推進しました

木曽三川流域の水環境を支える森林や農地の保全に向け、上中流域の経済振興の支援を目的として、流域内で生産される農産物や特産品を販売する「エコ市」を開催したほか、上中流域の生産者と下流域の仕入れ企業との商談の場を創出する「メッセ」を開催するなど、様々な流域連携事業を実施しました。



※第 1 期実行計画で取り組んだことや成果の詳細、それぞれの取り組みと水の環復活とのつながりについては、名古屋市公式ウェブサイトに掲載します。

第3節 それぞれの取り組みと水の環復活とのつながり

第2節で紹介した取り組みの事例が、水の環復活にどのようにつながるかを、「水の環復活を構成する3つの観点」に基づいて示します。

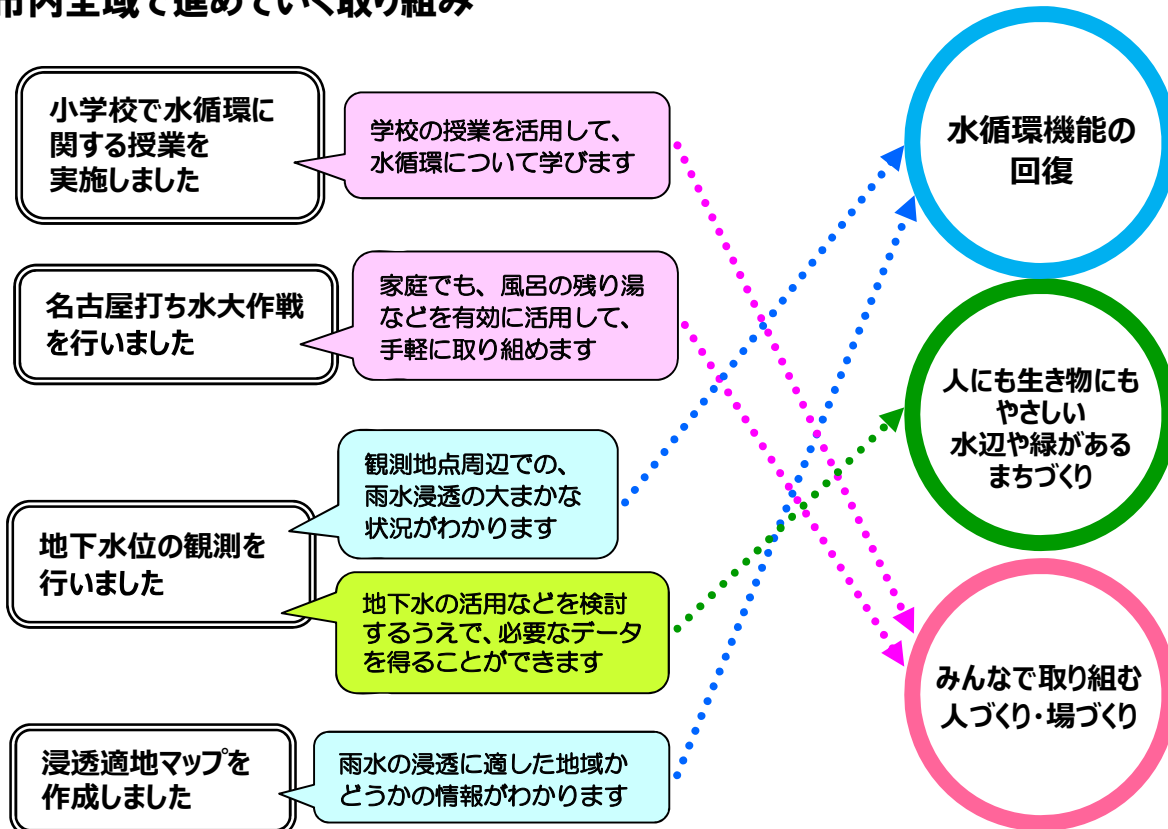


◎つながり図の見方

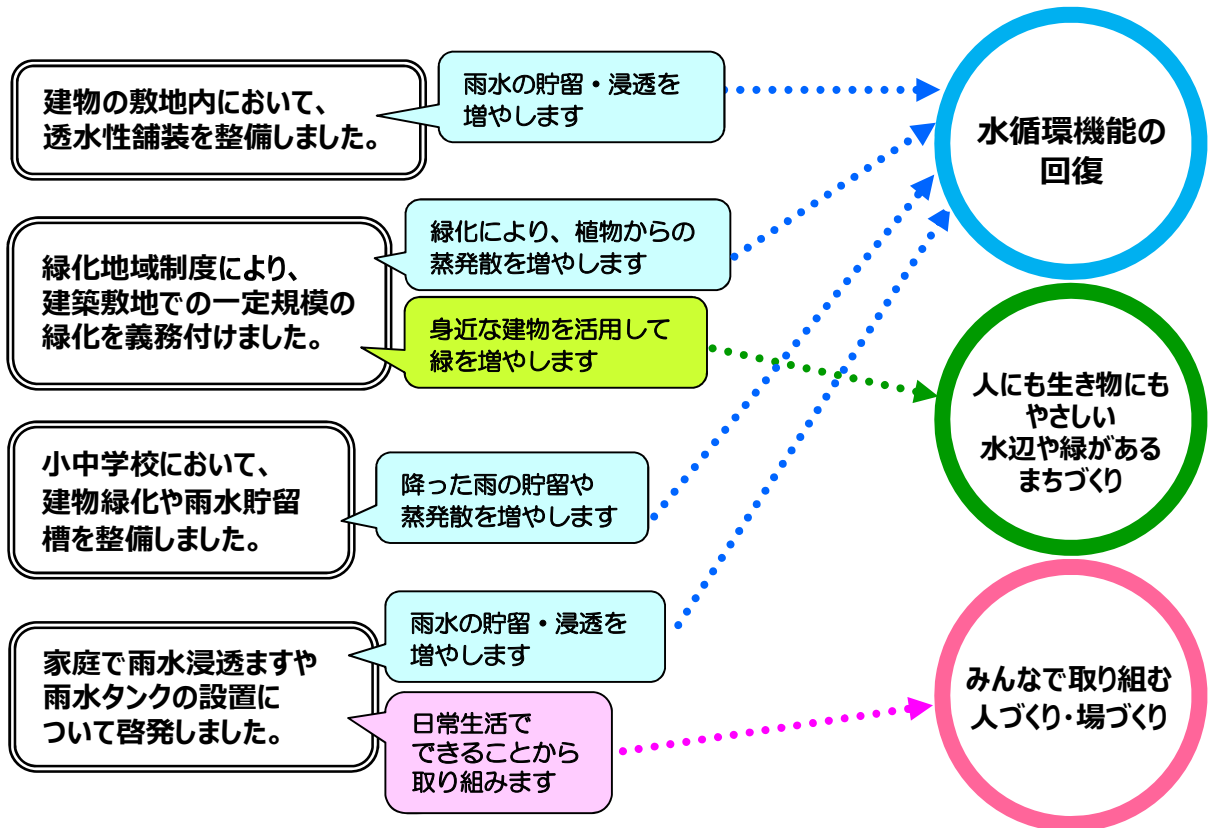
水の環復活に寄与する取り組みの例を で示します。

それぞれの取り組みが水の環復活とどうつながるかを で示します。

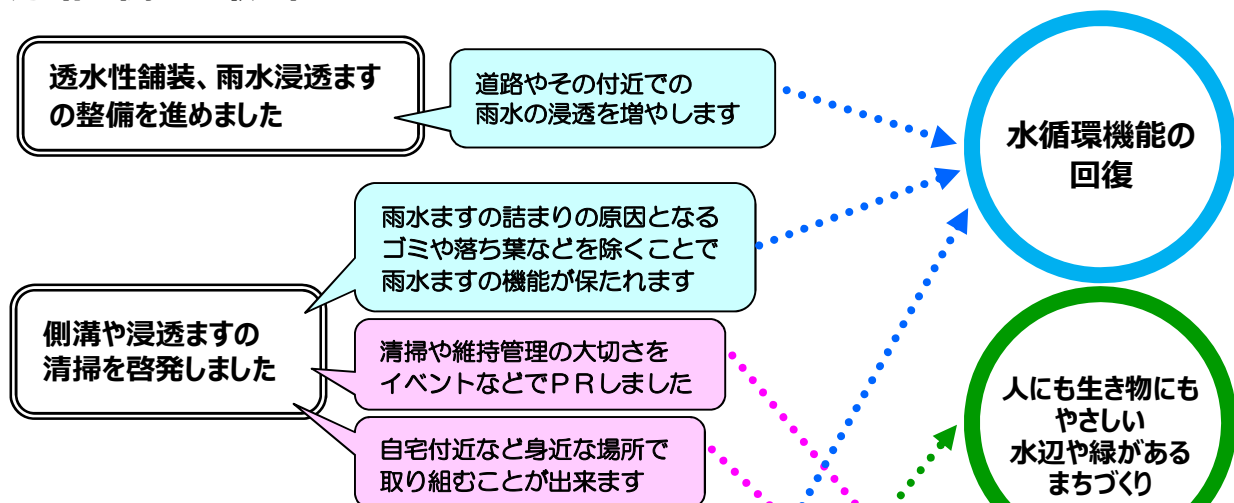
市内全域で進めていく取り組み



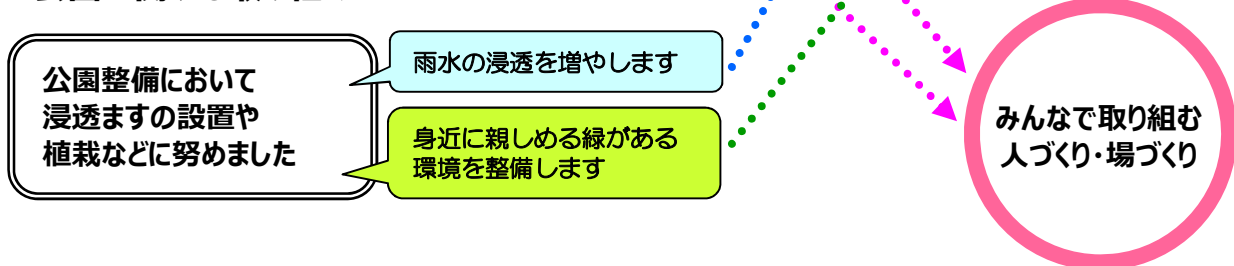
建築物とその周囲や駐車場に関する取り組み



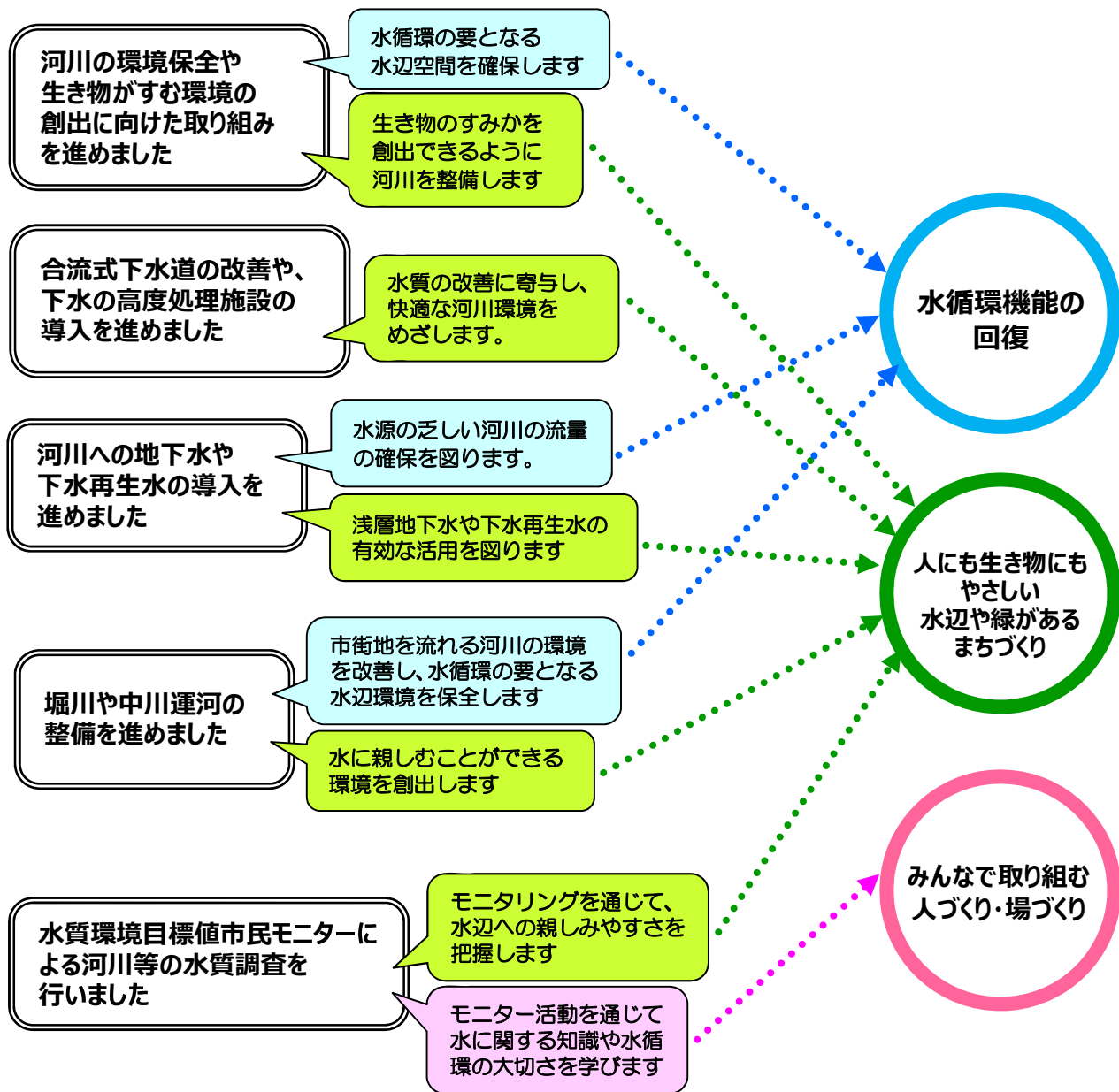
道路に関する取り組み



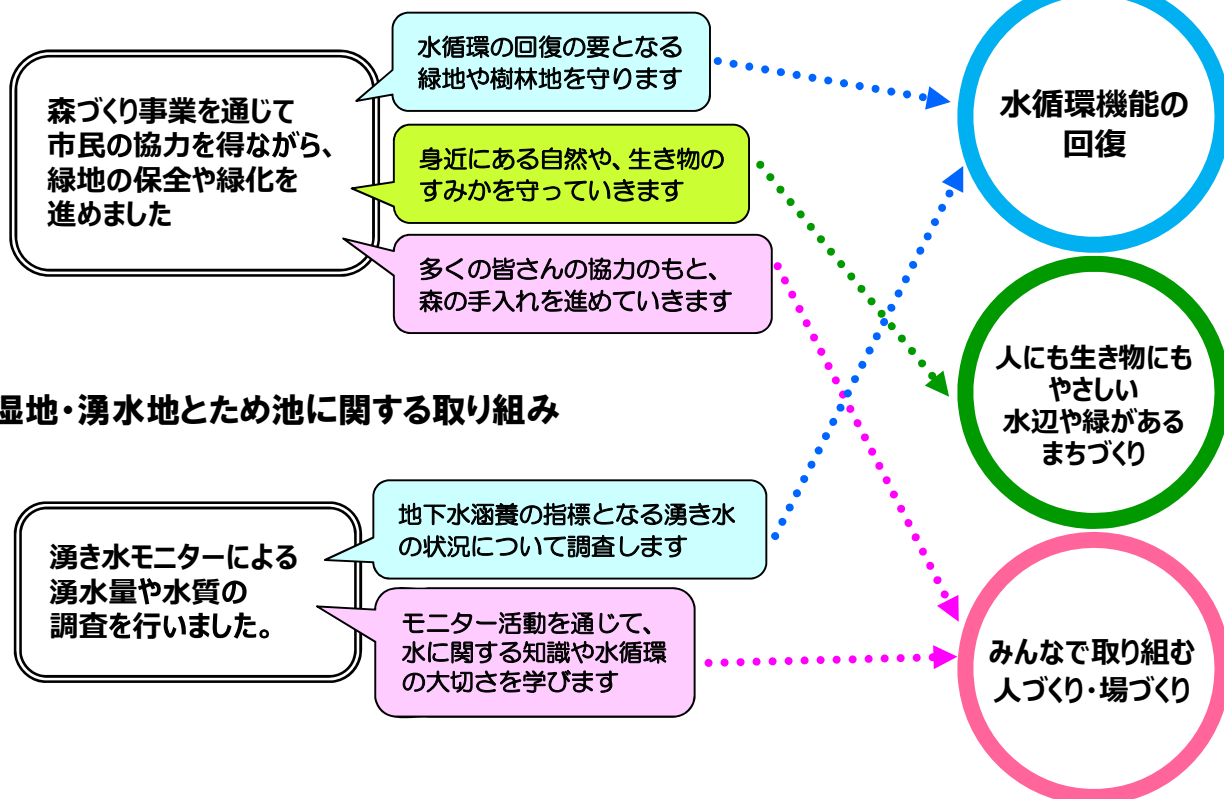
公園に関する取り組み



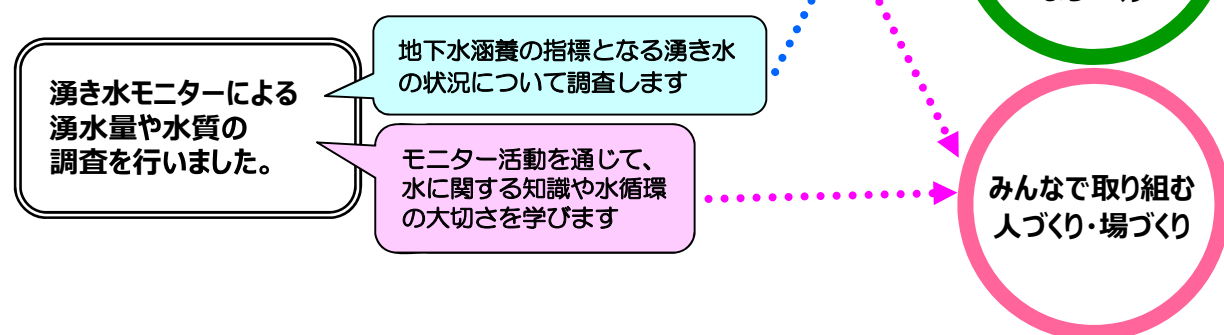
河川・運河・海に関する取り組み



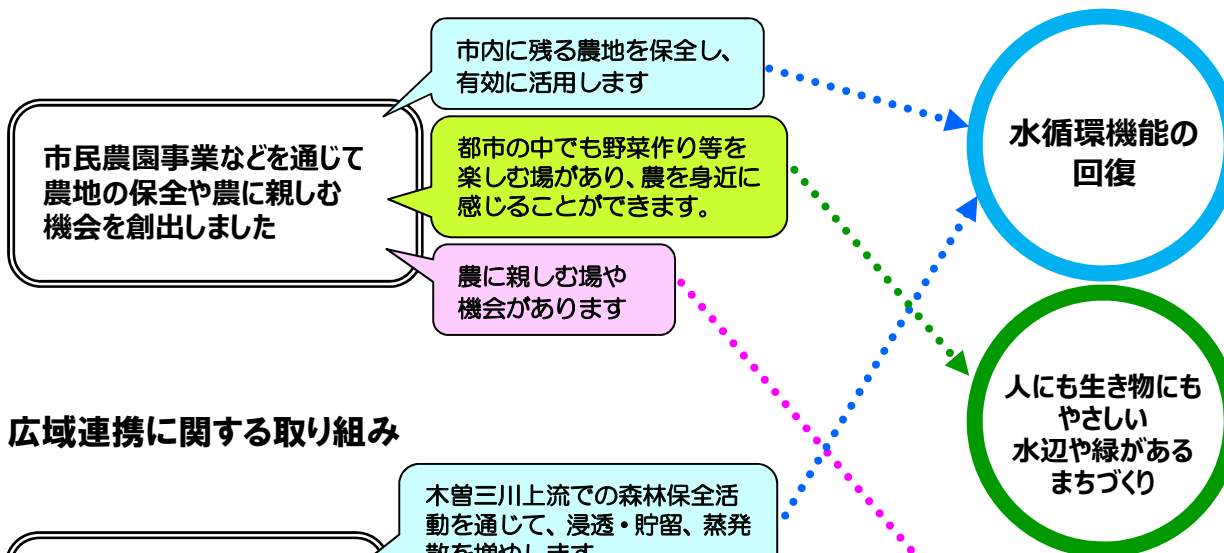
林や森に関する取り組み



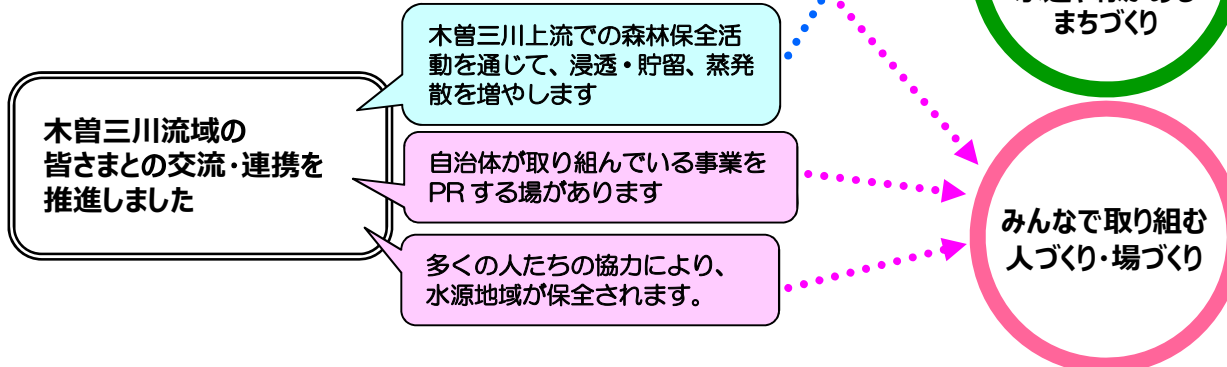
湿地・湧水地とため池に関する取り組み



農地、農業用水路に関する取り組み



広域連携に関する取り組み



名古屋市科学館での取り組み事例

名古屋市科学館では、改築の際に取り壊した旧理工館・天文館の地下部分を活用して、地下に雨水貯留槽を設置しています。屋根に降った雨水を貯留するとともに、豪雨による浸水被害の軽減に役立っています。貯留した水はトイレや壁面緑化の散水などに活用されています。



科学館の地下に設置された
雨水貯留槽の内部の様子

外壁の表面温度を抑えることによる空調負荷の軽減や、ヒートアイランド現象の軽減を図るため、建物の南面に約 1,500 m²の壁面緑化ユニットを設置しています。耐侯性の高い常緑のツル植物であるヘデラを主に採用して、年間を通じて環境配慮が目に見える外観を形成しています。なお、屋上の「星のひろば」には、芝生による屋上緑化も実施しています。

また、科学館の理工館2階には大型展示のひとつである「水のひろば」があります。地球における水の循環をイメージした展示であり、水の性質に関するたくさんの実験を楽しみながら、知識を深めることができます。



科学館の外観と、壁面部分を
活用した壁面緑化



水のひろば
(水循環を光と音の演出で表現した展示)

第4節 水収支の推移

第1期実行計画での雨水浸透・貯留、蒸発散に寄与する取り組みの成果を踏まえて、第1期を終えた時点での水収支を求めました。

緑の現況に関する調査結果や、雨水浸透施設等の整備実績をもとに、2012(平成24)年時点の水収支を計算すると以下のような結果となりました。

	基準年(2001年)	2012年
蒸発散	24.0%	23.3%
浸透・貯留	14.5%	15.5%
直接流出	61.5%	61.2%

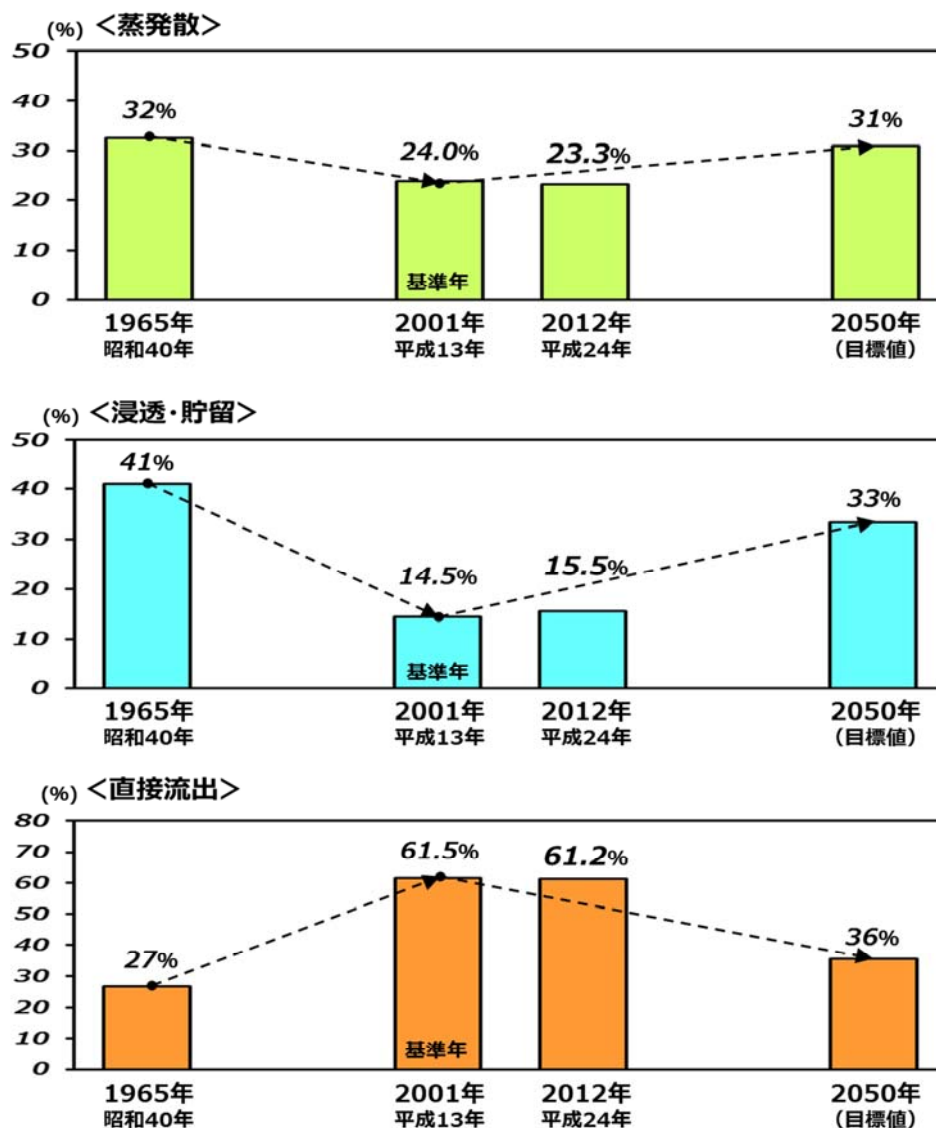


図2-1 これまでの水収支と、2050年の水収支目標の比較

項目	基準年 ⇒ 2012 年 (2001 年)	蒸発散の 増減	浸透・貯留の 増減
歩道、駐車場での透水性舗装	537,550m ² ⇒ 3,548,195m ²	…	+0.36 ポイント
道路、建物(市施設等)での雨水浸透ます	1,987 個 ⇒ 12,094 個	…	+0.16 ポイント
建物(市施設等)での雨水浸透トレンチ	0m ⇒ 48,065m ※ ²	…	+0.33 ポイント
戸建住宅での雨水浸透ます・雨水タンク	戸建住宅の 2% ⇒ 5%	…	+0.70 ポイント
その他貯留施設での貯留量	0m ³ ⇒ 320,855m ³ ※ ²	…	+0.07 ポイント
緑被率	24.85% ⇒ 23.3%	-0.71 ポイント	-0.60 ポイント
基準年からの増減		-0.71 ポイント	+1.02 ポイント

※ 1 : ポイントとは、蒸発散をはじめとする各要素が、基準年における降水量を 100 としてどれだけ増減したかを表した数値です。

※ 2 : 雨水浸透トレンチ、その他貯留施設での貯留量については、戦略策定時に、基準年の整備状況を 0 として水収支を計算している。

表2-1 基準年(2001年) と2012年の水収支の比較

➤ 蒸発散

郊外での宅地開発等に伴うまとまった緑や緑地、農地等の減少により、**2012 年時点での蒸発散は、基準年である 2001 年と比較して 0.7 ポイント減少した**という結果になりました。

蒸発散は緑だけではなく、ため池等の水面や農地の確保も有効であることから、水循環に必要なこれらの場所の保全を進めていく必要があります。

➤ 浸透・貯留

雨水の浸透施設・貯留施設の設置を進めたことにより、**2012 年時点の浸透・貯留は、2001 年と比較して 1.0 ポイント増加した**という結果になりました。

今後も引き続き、道路や公園での雨水浸透ますや透水性舗装の整備を進めていくとともに、市民や事業者の取り組みを促進していく必要があります。

第 2 期実行計画では、緑の質の評価や雨水浸透施設の技術の向上など、新たな知見を踏まえて、水の環復活に寄与する取り組みの効果がより正確に反映されるように、水収支の計算方法の見直しも検討する必要があります。

第5節 市民等の意識調査

1. 市民の「水の環復活」に関する意識、取り組み状況の調査

調査期間：平成 24 年 10 月 2 日から 10 月 16 日まで

調査方法：名古屋市内在住の満 20 歳以上の市民のうち、住民基本台帳をもとに
無作為に抽出した 2,000 人に対して調査用紙を送付した。

有効回答数：972 人（回収率：48.6%）

「水の環復活」の認知度・理解度

「水循環（水の環）」の認知度について調査したところ、「知っていた」と答えた人が 26.6%であり、全年代を通じて知らない人のほうが多いという結果が得られました。

なお、若年世代（20 歳代、30 歳代）では「知らなかった」と答えた人は 60%以上に上りましたが、高齢世代（60 歳代、70 歳代）では 50%未満で若年世代より低く、年齢が上がるにつれて認知度が高くなるという傾向が見られました。

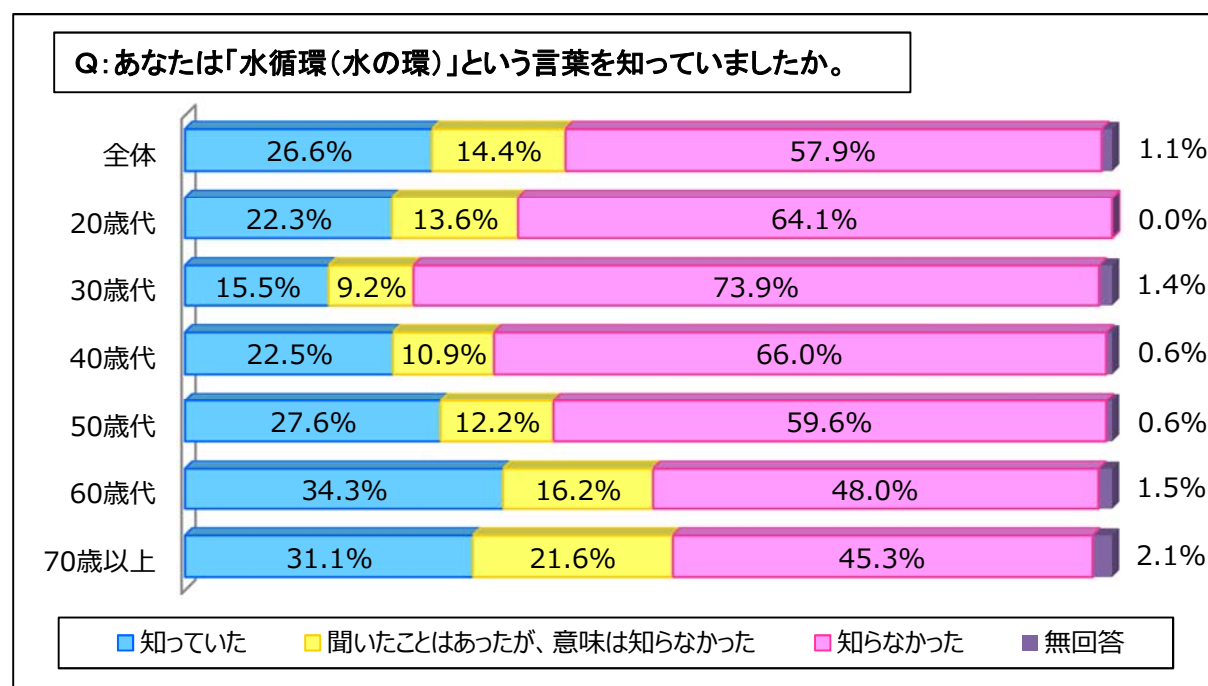


図2-2 「水の環復活」の認知度・理解度に関するアンケート調査の結果

雨水浸透・貯留施設の設置状況と、設置にあたっての関心・考え

雨水浸透施設・貯留施設の設置についてどのように考えているか調査したところ、「すでに設置している」、「今からでも設置したいと思う」または「自宅の新築や改修などの際に設置しても良いと思う」と回答した人の合計は40.6%でした。

「すでに設置している」と回答した人が5.1%であり、まだ少ない状況です。

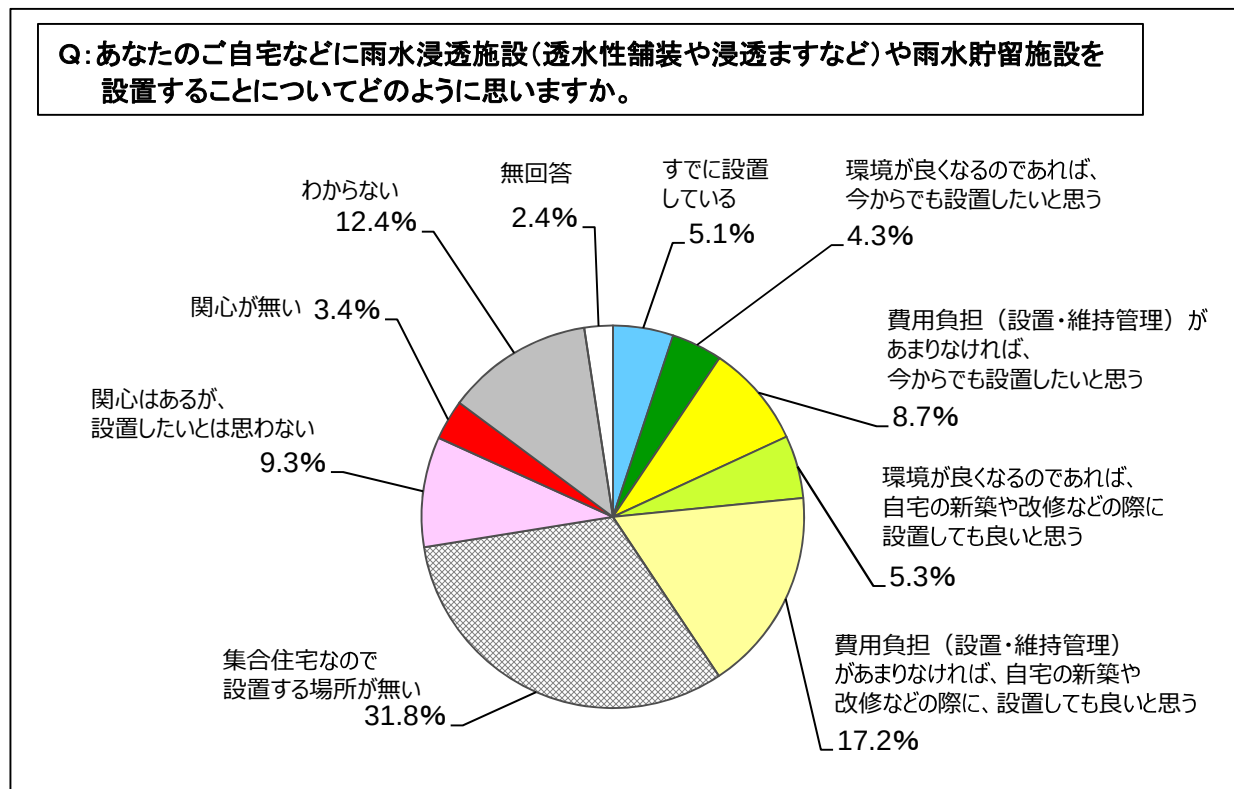


図2-3 雨水浸透施設・雨水貯留施設の設置に関するアンケート調査の結果

水の環が復活した名古屋市の将来像として実現して欲しいこと

『水循環に関する 2050 年の名古屋の姿』（14、15 ページ参照）を示し、水の環が復活した名古屋市の将来像について調査したところ、「洪水の危険性が小さくなる」（51.0%）という意見が最も多く、次いで「ヒートアイランド現象が緩和される」（42.7%）、「憩いや学びの場となるようなせせらぎや樹林が良好に維持されている」（30.7%）と続いています。

「洪水の危険性が小さくなる」については、平成 12 年の東海豪雨に代表されるような、豪雨による自然災害が東海地方でも発生していることから、最近の集中豪雨に伴う洪水や河川の氾濫を警戒する意見が多くありました。

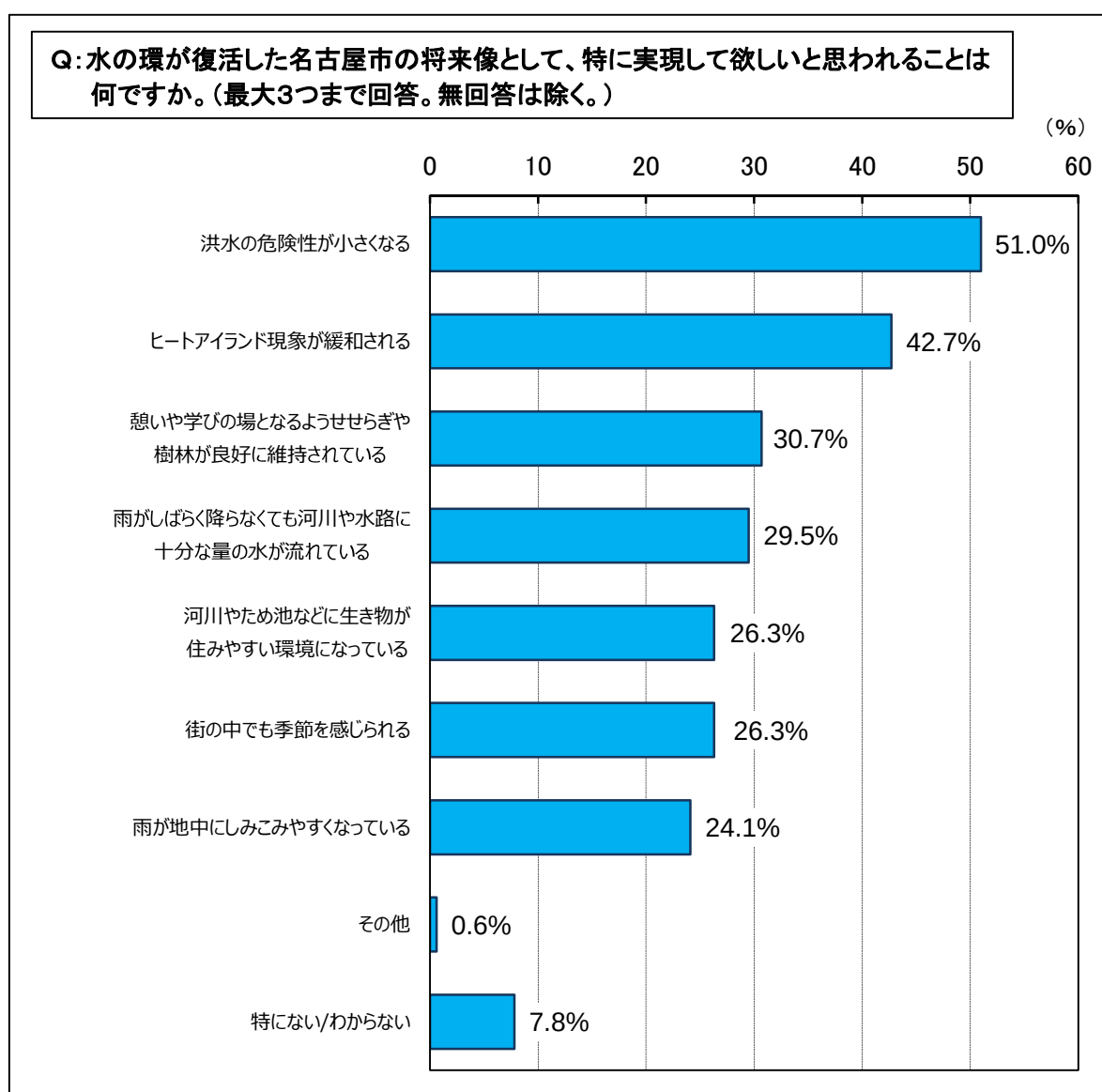


図2-4 水の環が復活して実現して欲しい将来像に関するアンケート調査の結果

「水の環復活」に関する意見

アンケートを通じて、「水の環（水循環）」に関して市民の皆様にご意見を伺っていただいたうえで、自由記述形式で多くのご意見やご感想をいただきました。

寄せられた主なご意見・ご感想を以下に掲載します。

「水の環」の評価に関すること

- とてもよい取り組みと思います。出来るだけ早く実行して欲しい。
- 水の環復活で名古屋市が潤いのある和らぎのある町になって欲しい。
- 水は全ての生物にとって命の源、上手に利用して楽しい生活に組み込んで欲しい。
- あまりなじみがない言葉だが、必要と思うので積極的なPRを続けて欲しい。
- 近頃短時間で大量の雨が降るので、環境の変化に対応できる水の環ができたらよい。緑を増やすとともに、アスファルトやコンクリートを減らす。

雨水浸透・貯留施設の設置に関すること

- もっと道路の舗装を地中に水がしみこみやすいものにかえて欲しい。
- 雨水浸透施設を大学など広い場所に設置する。
- 雨水を貯めることは取り組みたいが、ぼうふら等が発生すると困る。
- 雨水貯留施設は災害時に役立つと想定されるため、設備のための支援を市が実施する。
- 透水性舗装した道路は雨の日でも車も走りやすくとてもよいので、もっと増やして欲しい。

快適な河川や水辺環境に関すること

- 小さな憩いの場があっちこっちにあり、老若男女が自然に語りあえる場所が欲しい。
- 子供達がきれいな水辺で学んで遊べるように身近に感じられる環境を整備して欲しい。
- 身近な水の環として堀川の実在は大きいですが、自然の力ではなく人の力で少しでも改善されるといい。
- 中川運河をきれいにする。魚の生態系を守って魚が住みやすい環境を作ってください。
- 堀川に雨水を流して、川の水質をよくすることは出来ないか。河川の水量と洪水の危険性のバランスはどのようにしてとるのか。

水循環の広報・PRに関すること

- 水循環の情報発信が少ない。もっと具体的な取り組みとその目的に対する必要性を発信してください。
- 詳しい情報や知識を一般の目に届くところに掲載する。
- 広報なごやでも取り上げ継続的にPR説明をする。
- 今回初めて「水の環」について知りました。これからは意識していこうと思います。皆さんにもっと知らせてください。
- 子供達への浸透から始めることで、10年20年計画の広報活動が必要です。

都市の景観、緑化に関すること

- 家の周りはアスファルトで囲まれているので暑く感じます。もう少し緑と土があっても良いと思う。
- 自然を感じることができる街にして欲しい。ビオトープの整備を進める。
- 街の中に季節が感じられるような場所があればとても素晴らしい。
- 緑の多い街にして欲しい。
- 街路樹での緑化を多くして欲しい。
- 庭や公園緑地の街路樹が適切に維持管理されることを期待します。月一回の道路清掃・除草・排水溝の清掃など町単位で定着させる。

災害(洪水や河川氾濫等)の防止に関すること

- 私の住んでいる所は庄内川と名古屋港がそばにあり、洪水は切実な問題なので、水の環境復活 2050 などや戦略が成功することを祈ります。
- 最近の集中豪雨は予想を超えて襲う傾向があり、河川の氾濫がないように願います。また道路でも排水が悪いところがあり対応をお願いします。
- 大雨が降ると洪水になってしまう地域なので改善されるとうれしいです。
- 大雨の時、道路が冠水しないよう、舗装や排水を考えて欲しい。
- 東海豪雨のようなことは二度とあってはならない。
- 災害時に水道車の到着をまたなくてもいいように、日頃からため池、学校のプールなどで水を確保して欲しい。

市民参加・学校教育の推進に関すること

- 扇川沿いをよく散策するが、ゴミが散らかっていたり雑木が茂っていたり環境はよくない。地域住民が清掃などのボランティアの取り組みができるよう機会を増やしてください。
- 「水循環」の計画があることを初めて知り、小学校や中学校でも学校で「水循環」を学ぶ機会があればよい。
- 学校と学区に一箇所ビオトープを作り、子供達が自然の循環を体感できるようになったらよい。

おいしい水に関すること

- 関係当局で、より一層美味しい「名古屋の水」をお願いします。
- 名古屋の水道はおいしい水だと思っています。今後も安心して飲める状態であって欲しい。

その他

- 「水」は生命維持のために地球上の生物すべてが大切に分け合う資源なので、特定の企業や外国などによる支配の道具にされないよう、名古屋市は片寄った考えではなく広く深く意見を集め、今後の方向性を決めてください。
- 一つの市だけでは効果は実感しにくいので、近隣の市との協力も必要ではないか。
- 名古屋市は他県とは異なり、木曽川水系のおかげで不便を感じなく感謝している。

2. 環境保全に取り組む事業者・市民団体等の取り組み状況の調査

調査期間：平成 25 年 8 月 30 日から 9 月 14 日まで

調査方法：平成 25 年 9 月 14 日に実施した『環境デーなごや』にブースを出展した
90 団体に対して、調査用紙を送付した。

有効回答数 32 団体 35 人（回収率：35.6%）

市民団体による現在の取り組み状況

水の環復活のための取り組みを行っているかたずねたところ、「行っている」と回答した人は 35 人中 21 人（60%）でした。取り組んでいる内容としては、緑の保全が多かったほか、水質や生物の調査、清掃活動や自然観察会という回答が多くありました。

「どんな取り組みをしたらいいかわからない」という意見も多く、また、「水の環復活のための取り組みを行っていない」と回答した人のなかにも、環境教育や緑を守る活動といった、実は水の環復活に役立つ取り組みをしているという事例もありました。

今後は『水の環復活に役立つ取り組み』をわかりやすく伝えていく工夫が必要です。

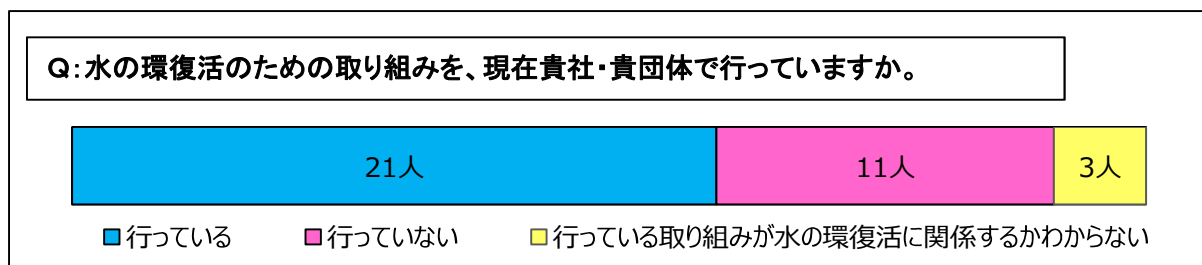


図2-5 水の環復活に役立つ取り組みに関するアンケート調査の結果

Q: 水の環復活のための取り組みを行っていない理由は何ですか。（複数回答あり）

- ・どんな取り組みをしたらいいかわからないから：6 人
- ・水循環（水の環）について知らなかったから：3 人
- ・お金をかける余裕がないから：2 人
- ・水循環（水の環）や環境にあまり関心がないから：1 人
- ・その他：2 人

Q: (取り組みを行っているとの回答に対して) 現在行っている取り組みの内容を教えてください
(複数回答あり)

緑に関すること (10 団体)	緑のカーテンの設置 (3 団体)
	森林保全のための交流活動
	屋上緑化、壁面緑化 (3 団体)
	緑を増やす (2 団体)
	駐車場での緑化
	緑地帯の整備
	名古屋の水源地である木曽川の源の食育活動
	西の森の植樹会への参加
水質調査、水質改善 に関すること (5 団体)	堀川の定期的な水質調査 (2 団体)
	台所からの汚水を少なくする工夫、アクリルたわしの使用
	水質改善への支援
	湧き水調査
清掃活動に関すること (5 団体)	堀川付近の清掃 (2 団体)
	戸田川大清掃
	東山総合公園周辺道路の清掃
	会社の周辺の清掃
イベント実施 に関すること (4 団体)	里山、緑地、川などで自然観察会を実施
	戸田川自然観察会
	東山自然観察会 (庄内川、天白川などの河川、田んぼ)
	自然体験授業
生物の保全、調査 に関すること (3 団体)	ホタル調査、広報
	堀川の生物調査
	在来生物保全の啓発
	ため池の池干しへの参加 (2 団体)
	オオキンケイギクの分布調査、駆除
浸透貯留に関すること (1 団体)	雨水タンクによる雨水利用
その他 (8 団体)	省エネ指導、自然エネルギーの利活用の推進
	間伐材の利用
	地産地消 (2 団体)
	野菜作り、農業体験
	ヒートアイランド現象を軽減させる効果のある遮断塗料の普及啓発
	水辺にゴミを捨てない
	生ゴミを肥料に変えることで地産地消につなげていく

豊かな水の環がささえる『環境首都なごや』を実現するための取り組み

水の環復活のために必要だと思う取り組みについてたずねたところ、「緑を増やす」、「ため池や湿地、農地などを守る」、「浸透ますなどを設置し、雨水を地中にしみこませる」が必要であるという意見が多く得られました。

また、現在不足していると感じられる取り組みとしては、「緑を増やす」、「ため池や湿地、農地などを守る」が多くあげられました。

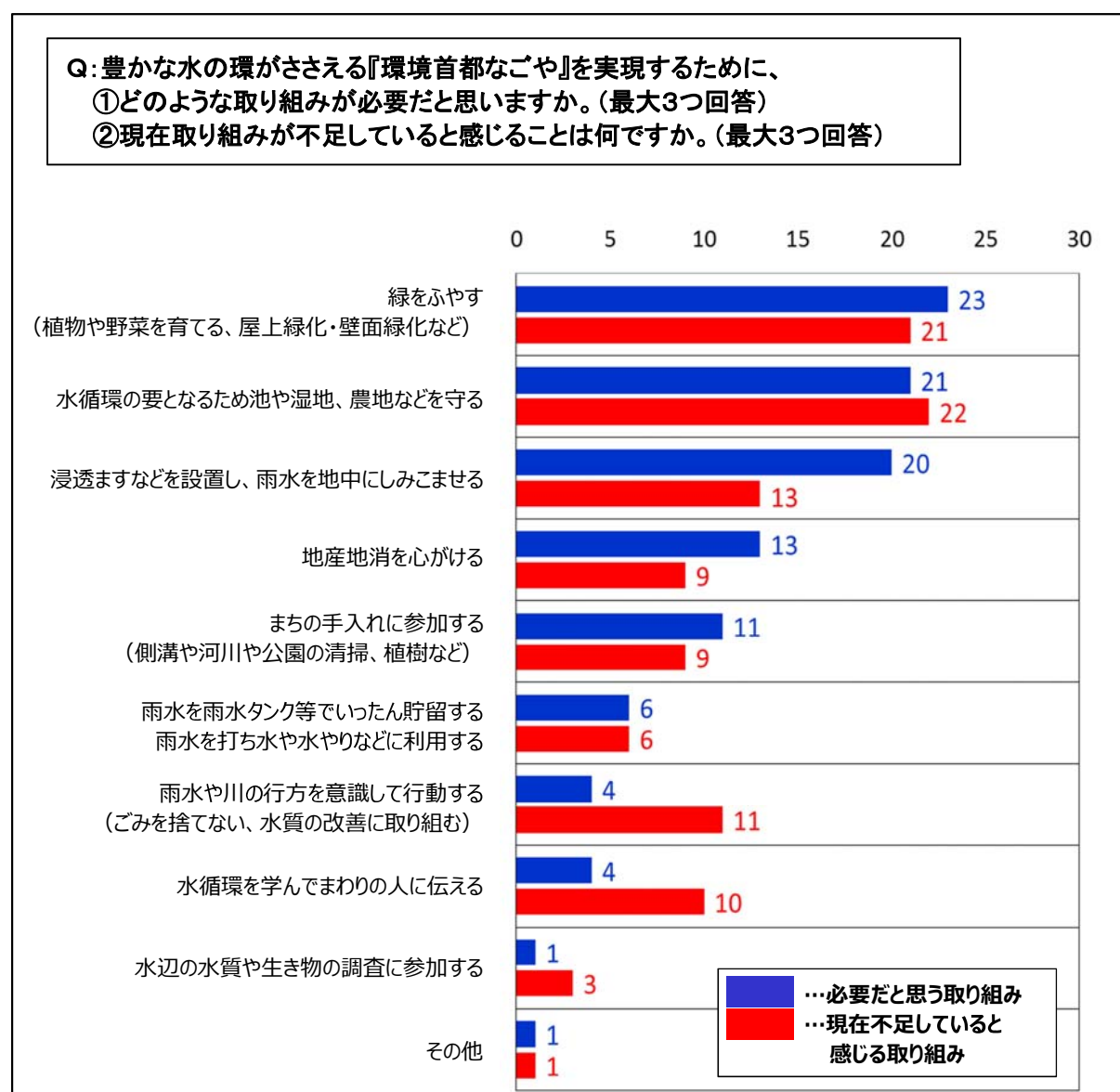


図2-7 水の環復活に役立つ取り組みに関するアンケート調査の結果（その1）

豊かな水の環がささえる『環境首都なごや』を実現するために、団体としてできること

団体としてできると考える取り組みをたずねたところ、「地産地消」のように、個人レベルでも行うことができるような取り組みについて、回答が多くありました。

「緑を増やす」、「まちの手入れに参加する」、「水循環を学んでまわりの人に伝える」といった回答も多かったことから、市民と行政との協力により取り組みを進めていく可能性があると考えられます。

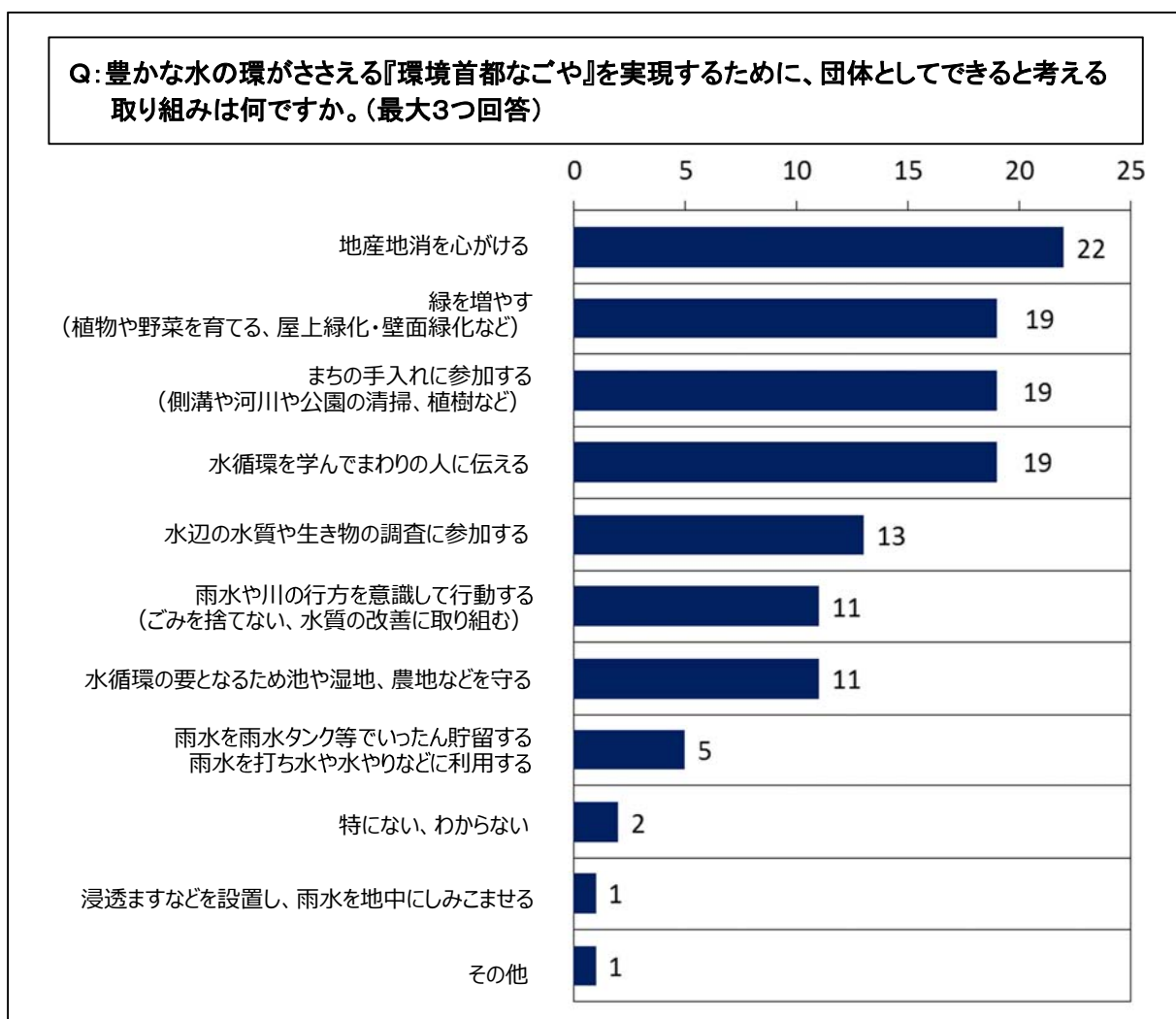


図2-7 『水の環復活』のために団体として取り組みができることに関するアンケート調査の結果

『水の環復活』のために行政が行うべきと考える取り組み

行政に特に取り組んで欲しいことについては、「緑化を推進する」、「水循環の要となるため池や湿地、農地などを守る活動を行う」といった回答が多くありました。

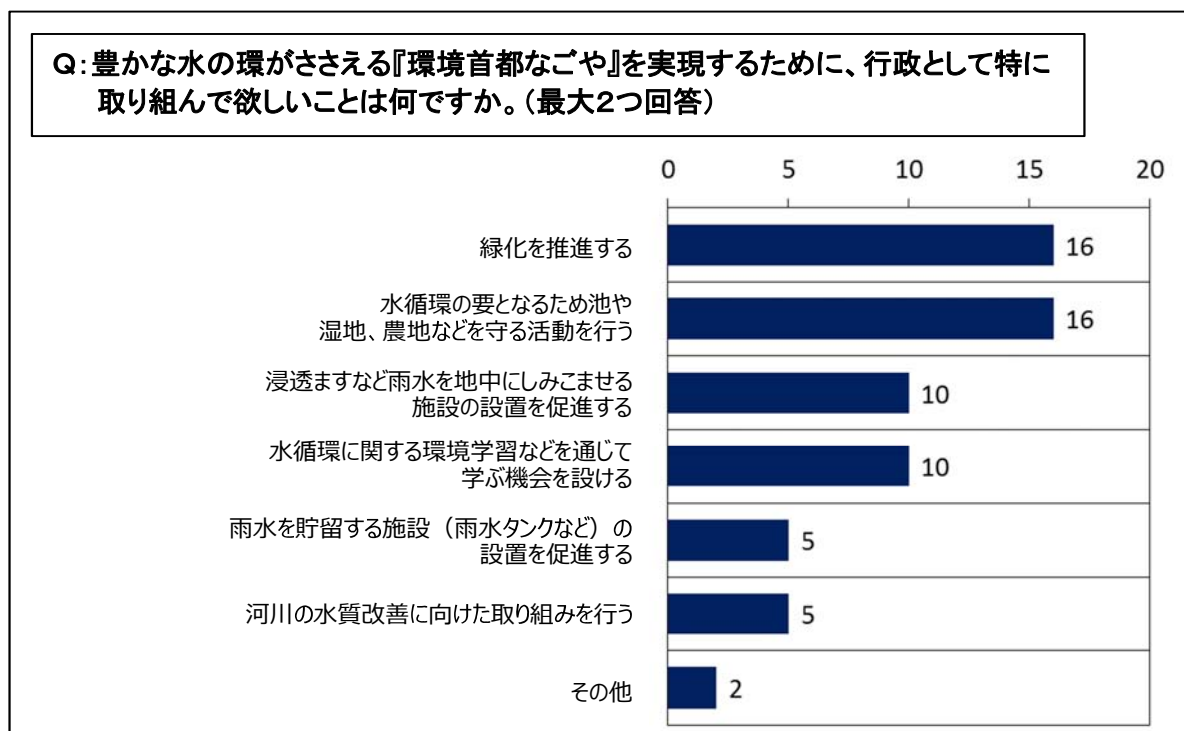


図2-8 水の環復活のために行政に取り組んで欲しいことに関するアンケート調査の結果

第6節 第1期実行計画の課題

戦略においては、第1期でめざす状態を次のように設定していました。

めざす状態を実現できたかをふりかえりながら、第2期実行計画で取り組んでいくべきことについて考えていきます。

期間	行政の計画や施策など	市民・事業者・研究者・NPO など
第1期 (～2012年)	○水の環復活に向けて、計画や施策の整合性がほぼとれています。 ○施策の内容が不足する点については、分野横断的に検討が始まっています。	○多くの人が、水循環の問題について大まかに理解しています。 ○先進的な人や企業等が、水の環復活に向けた行動を実践しています。

1. 第1期実行計画をふりかえって

- 各分野の個別計画において健全な水循環の回復という考え方を盛り込み、水の環復活に向けた取り組みを進め、その成果を整理することができました。
- 水収支の算出結果では、緑地や農地等の減少により「蒸発散」は減少したものの、雨水浸透ますや透水性舗装の整備を進めたことで、「浸透・貯留」はわずかに増加しました。
- 市民アンケートの結果によれば、水循環の問題について知っていたと答えた市民は26.6%であり、多くの人が水循環の問題について理解しているとはいえない状態です。
- 市民アンケート調査の結果によれば、水の環を復活させることによって、「洪水の危険性が小さくなる」、「ヒートアイランド現象が緩和される」、「憩いや学びの場となるようなせせらぎや樹林が良好に維持されている」状態になることを望んでいる人が多いことがわかりました。
- 環境保全に取り組む市民団体へのアンケート結果からは、どのような活動が水の環復活につながるのかということを伝えていく必要があるという課題が見えてきました。
- 事業者がどのような水循環に配慮した取り組みを行っているかについては、把握できていない状況です。

2. 第2期実行計画に向けて

○ 水の環復活に向けた取り組みの促進

- ・ これまでの施策や取り組みをより一層推進し、水収支の改善を図っていく必要があります。

○ 水循環の認知度・理解度の向上

- ・ 水循環の問題を理解している市民の数がまだ少ないことから、水循環について学ぶ機会を増やしていくとともに、施策の進捗状況や水循環の重要性を市民にわかりやすく伝える工夫をしながら情報提供していく必要があります。

○ 事業者の取り組み促進

- ・ 事業者による取り組みの促進を図るために、まずは、事業者の水循環に配慮した取り組みの現状を把握する必要があります。
- ・ 先進的な取り組み事例の紹介等を通じて広く情報発信し、具体的な行動を促すことが必要です。

○ 水の環復活を意識して行動する人づくり

- ・ 家庭で緑を増やす、雨水浸透ますを設置するなど、水の環復活を意識した行動を実践する人を増やしていく必要があります。
- ・ 多くの市民が水循環の問題について理解し、水の環復活を意識した行動を実践できるよう、水循環機能の回復を目に見えるかたちで展開していく必要があります。